



TITLE:

他山の石

AUTHOR(S):

小堀, 憲

---

CITATION:

小堀, 憲. 他山の石. 静脩 1965, 2(1): 1-1

ISSUE DATE:

1965-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36257>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

# 静脩

1965年 5月

Vol. 2, No. 1

## 他山の石

小堀 憲

イギリスのケンブリッジへ行ったとき、トリニティ・カレッジを訪ねたが、いまでも、はっきりと印象づけられているのは、ここの図書館のすばらしさである。このカレッジの名誉を高めた学者の書いたものが、ぎっしりとならんでいるのは、実に、壮観の一語で尽きるといった。ことに、ニュートンの物を集めたコーナには、この大科学者の原稿、論文、著書が、その書齋を思わせるようなふうに、集めてあって、図書館に来たというよりも、ニュートンの研究室へ来たような感を受けた。プリンキアの1686年版のページをくっていると、ニュートン自身が赤インクで加筆しているのが、しばらく時の経つのを忘れて、読みふけたが、このような資料を、ふんだんに持っているイギリスの科学史家を羨しく思うとともに、立派な研究が出てくるのは、もっともなことだと思ったが、このように、この大学の名誉を高めた人達の研究業績を集めて、完全な状態で保存しているのをみて、「かけだし」の大学は、とてもかなわないと思った。

パリの地下鉄の駅バレ・ロワイヤルから、リシュリウ街を北へ進むと、右側に、宮殿のような建物がある。それがビブリオテク・ナショナルであり、貴重な文献が、完全に保存されているところである。書物やマヌスクリプトのコレクションもさることながら、そのリストの完備していることも、すばらしいものと思った。アルス・マグナの1545年版のフィルムをとることができたことはうれしかったが、ただ集めるだけではなく、保存することに万全を期していることが、よく現われていて、羨しく思った。というのは、「保存」の点については、日本は弱いからである。

貴重な和算書が「しみ」の暴威に屈している現状をみるたびに、心が痛む。このように「しみ」を思うままにふるまわせていることを、後世の研究者は「あいつらは何をしていたのであろう」と非難することだろうと、気が気でない。

この点では、特にアメリカはすばらしい。プリンストン大学の中央図書館を訪ねたとき、日本やシナの書物がならんでいる部屋を見たが、漢籍のコレクションでは、本学の人文科学研究所のものからみたら劣っているようである。しかし、温度と湿度とが調節されているので、「しみ」が発生しない。防虫剤といった不完全な「まにあわせ」でないから、すべての資料が、安全な状態で、保存されている。「予算がない」といって、放置している日本とくらべると、雲泥の相違であるが、文化の伝統に貢献しなければならない大学の図書館は、それでよいのだろうか。欧米においては、「文献は生きている」のに、わが国では、日本文化を伝える文献は、日1日と、「亡んでいる」のである。（理学部教授）